檀一雄全集——第八卷

817

セイ

全集 Ⅷ

新潮社版

檀一雄全集

第八巻

© YosoKo Dan, Printed in Japan, 1978.

印刷　1978年1月20日
発行　1978年1月25日
著者　檀 一雄（だんかずお）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
郵便番号 162
東京都新宿区矢来町71
電話東京 266 -（業務）5111（編集）5411
振替東京 4 - 808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田加藤製本株式会社
定価　2200円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

全詩 5
エッセイ 71
解題 376
年譜 383
著書目録 409

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

檀一雄全集

第八巻

全

詩

目次

虚空象嵌

烟のなかに　二

望夢

雲霧の宴　三
悪夢　三
虚空象嵌　三
望夢　三
無題　三
烟のなかに　一四

掬花

恋歌　一四
おなじく　一五
おなじく　一五
おなじく　一五
おなじく　一五
春日悲歌　一六
いくさの友がうつしくれし写真にそへ　一六
佐藤春夫先生に贈る歌　一七
優曇華　一八
黴の唄　一八
かはづの唄　一八
悲歌　一八
掬花　一九
夕べに狂ふしれうたひとつ　一九

無音歌
無音歌　一九
讃歌　二〇
曾可と呂鈍の話
曾可と呂鈍の話　二二
距離　二三
詩譜　二四
夏草　二六
闇夜には　二七

檀一雄詩集

誰も知らぬ　三〇
月地抄　三一
渤海戯唱　三一
挽歌　三一
おなじく　三一
風信　並に序　三三
僻土残歌　三三
岳陽秋月　三三
誰も知らぬ　三三
わが鎮魂歌
惜別　三三
鎮魂歌　三四

わが為に薦むる鎮魂歌　三五
観樹径行　三五
屋久島哀傷　三六
浮んだ魂　三八

ものうい獄舎

ものうい獄舎　三九
恩寵　四〇
凍えた誘惑者の歌う　四一
悲歌　四四
ちぎれた月のする媚歌　四五
離愁　四九

花の下

音信　五〇
波（ポルト・ド・バァカス）　五一
落下　五一
花の下　五三
無音歌　五三

唐詩六篇

杜甫五篇

菊花の節崔氏山荘にて　五五
水のほとり　五六
旅　五七
春に帰る　五八
秋の浦浪　五八

柳宗元一篇

江雪　五九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

拾遺詩篇

初期詩篇

青　春　六〇
日廻りの恋　六〇
ランデヴー　六一
晴　色　六一
鮮かな風景　六一
初　夏　六二
恋　六二
秋　六三

さみだれ挽歌

さみだれ挽歌　六三
祝ぎ歌　六四

老残四月の歌　六四
無　題　六五
大西洋孤独哥　六六
雨ぞ零らん　六六

墓碑銘

無　題　吹雪の道　六六
無　題　愛の透き間　六七
無　題　冬の瓦　六七
無　題　魔笛　六七
太郎のあんよが冷い　リツ子・その死　六八
無　題　小説太宰治　六八
残　欠　小説太宰治　六八
墓碑銘　火宅の人・風の奈落　六九

虚空象嵌

堕落天使虚空に星の音ばかり

烟のなかに

いつのことにやありけん、本郷の朽ちたる場末に紫苑と申す茶房あり、あやしくをぐらきさまかはほりふくろふのすみかにも似たれどもそのくづれたる壁によりて宵越しの露に冷えたるびーるあふれば不思議に真昼の慚愧はうせてゆふべのあかりともるなりわれこよなくその倦怠のおもきを愛してひねもす去らず鰯干せる猫の餌をさきくらひあめ色のびーる瓶を林立散乱させて金殿玉楼の栄をまのあたりにむすぶ、銷びたるれこーどは酔ひにつれてむなしくむせびうつけもののたましひはたかく天涯に漫歩してやうやうに降らず

よき声ぞ、たが唄ならむ?
だみやと申すぱりの歌姫にこそ、
あまきをみなの声はあやしきれこーどの回転にのりてしきりに血のいきをさそふ、
なにといふ唄ならむ?
烟のなかに
とをみなあるじは声ほそめていふ、
さればこそ
いきたるもの烟のなかにまよひをどりて空漠無頼、
よき唄なり
流涕酔狂くりかへしてやまず、ややありをみなあるじずるく嗤ひていふやう、
烟のなかにとは煙草の烟の意なるべし
われいたく奮激して声あらげ、
しからず、烟のなかにとはけむのなかなり、何とて煙草の烟にてあるべき、
すなはちつづけさまに二三本のびーるあふれどさびしさつきず、
しからばわが歌そへん
とて低唱哀吟すとしかいふ

望夢

雲霧の宴

人は針の筵といふけれども、私は雲霧の筵に坐つた思ひで　津島修治

神様の弾丸はわしらの胸をつらぬいた
業罰の硬直をわしらは尊大にすりかへる
雲霧の宴を張らう

きみの胸にはまだ一枚の蝶が舞ふ
わしの胸には何やら小づらにくい小鳥が飛ぶ
小鳥がわしをねらふか
わしが小鳥をねらふか

雲霧の宴のさなかにも
わしははや墜落をまぬかれぬ
既に傲岸の足許から
また頭脳の逆上をしりめに

女の腹のへりに水洟をたらすは
えい　末世の法

悪夢

何かしら改悪された夢のなかで
てんてんとわしが歩むとき
狐狸はちよろ火を燃やす

行衛もなく禿げちよろけた風物の底に
とろとろ薄氷のはぜる音もあつて
その鬼火は
くらいくらい

何かしら改善したい希願もあつて
たんたん夜道をはしるのだが
はや八方から火は放つてあつて
その夜道は
とほいとほい

梟の夢にもたける鬼火哉

虚空象嵌

この夢は
白い頁に折りこめ
ああ　この夢も
白い頁に折りこめ
その頁頁　夢にくらみ
皎皎
皚皚
舞ひのぼるもの
遂に虚空に満つと

望　夢

わしは千年の歴史を喚ばうて
ここら暴風のなかに
悉皆の風物
なべて指頭にをどらせんとす
濃き妄念の痕も
斯く淫猥な夢も
あしたわしの掌のうへで
手堅きガラスに変じ
とほくしまりて果つるかな

ほどちかき野山には
典雅なる朝舞ひ降る

無　題

蒼き海に
真昼だつ
あな凄ごの
しじまかな

ただ白う
真帆ひとすぢ

悔恨の傷痕曳きて
むせびゆく

されば われ
かの海の辺に立ち
声もなく
叫ぶばかりなり

烟のなかに

魚ら清水に
蒼く棲み
幼き夢の
清かりし
やがて三十路の
春も過ぎ
わがいきいとど
すさみたり

さはれいのちの
懸崖に
笛吹き鳴らし
をめきたち
よぶぞまよひの
烟の歌

掬花

恋歌

君をし思へば
舞ひのぼる鶴千羽
君をし恋ふれば
今宵弓筈の音
うてなは高く
月は遠く
君をし忍べば
嗚呼
若水に鯉もをどるか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.